



お茶の水女子大学 グローバルCOEプログラム 格差センシティブな人間発達科学の創成 ニュースレター 第1号

世界最高水準の 研究基盤の下で世界を リードする創造的な人材育成

- 2面 各領域の研究紹介/2007年度の活動報告
- 3面 第1回国際シンポジウムに参加して/国外事業推進担当者紹介
- 4面 来年度以降の計画/2008年度 開催予定

拠点リーダー挨拶

本学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻から申請していたグローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」が、このほど採択されました。

グローバルCOEプログラムは、大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的としています。平成19年度は、「生命科学」、「化学、材料科学」、「情報、電気、電子」、「人文科学」、「学際、複合、新領域」の5分野について合計281件の申請の中から、審査を経て63件が採択されました。「格差センシティブな人間発達科学の創成」は、人文科学分野で採択されたものです。

人間発達科学専攻は、21世紀COEプログラムに引き続き、今後5年間、「社会的公正に敏感な」女性研究者を育成し、国際的にも通用する教育

研究拠点を構築するために、さまざまな教育プログラムや研究プロジェクトを遂行していきます。グローバルCOEプログラムは、国際的な意味で人材の吸引力を持った拠点形成を目的としていますので、高度な研究プロジェクトを走らせるのは当然です。しかしながらプログラムの重点は第一に若手研究者の育成と教育にあります。教育プログラムとしては、リサーチ・アシスタントの雇用、院生・若手研究者を対象とした研究プログラムの公募、海外学会や調査への派遣、英語論文作成・発表支援、各種セミナー・シンポジウムの開催、実践現場との協働研究プログラムなどを計画しています。なかには、若手院生、研究者のみなさんが、あっと驚くようなプログラムも含まれています。

ご支援をどうかよろしくお願い申し上げます。

拠点リーダー 耳塚寛明



耳塚寛明 拠点リーダー

拠点形成計画の概要

【拠点形成の目的】

本拠点は、人間文化研究科（2007年度4月より人間文化創成科学研究科に改組）人間発達科学専攻を中心に、格差にセンシティブ（敏感）な人間発達科学の創成と、その担い手となるソーシャル・ジャスティス（社会的公正）にセンシティブな人間発達研究者、特に女性研究者の養成を目的として形成される。特に本拠点がめざす人材育成と研究活動の目的は、以下の通りである。

まず、人材育成であるが、従来人間発達研究者は、自身の研究領域と他の研究領域との関係、および、自分の行っている研究と社会とのつながりについて、十分自覚的でないタコツボ化の傾向、研究世界と実践世界が遊離する傾向、社会的課題意識が希薄化する傾向があった。

本拠点では、こうした傾向を克服する新しい人間発達研究者像を、ソーシャル・ジャスティスにセンシティブな研究者として規定し、その育成という課題に正面から取り組むことをめざす。

次に研究活動であるが、本拠点では、21世紀COE「誕生から死までの人間発達科学」での実績と成果をふまえて、人間発達の時間軸を貫く格差の次元を国際的格差、教育・社会的格差、養育環境格差の3つの次元に設定する。そして、それぞれの格差ごとに発達の時間軸を貫く格差の再生産構造を浮かび上がらせるとともに、その解明と構造転換への道筋を探究することをめざす。



各領域の研究紹介

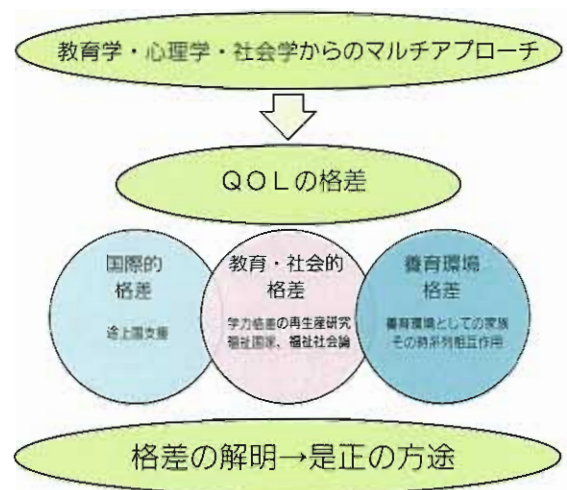
人間発達の時間軸をつらぬく格差の次元を3つのレベルに設定し、それぞれについて、発達の時間軸ごとに、教育学・心理学・社会学からのマルチアプローチによって格差の再生産構造を浮かび上がらせると共に、その解明と構造転換への道筋を探究する。

第1の国際的格差領域では、グローバル化下における国際的格差の構造に着目し、国際的格差構造の解明とその是正のための教育支援のあり方を発達の各ステージに即して解明する。

第2の教育・社会的格差領域では、教育や職業を通して現れる格差のメカニズムを明らかにすることを課題とする。主に教育学的、社会的視点から、学力格差の構造、トランジション（移行期）における格差、老年期における格差等を扱う。

第3の養育環境格差領域では、養育過程における家庭や保育・教育施設の中での環境と個人との時系列的な相互作用に着目し、人間の発達に沿ったケア・クオリティやQOL（クオリティオブライフ）に現れる格差について、主に心理学的視点からその解明をめざす。

[研究の視点]



2007年度の活動報告

第1回国際セミナー 2007年12月25日（火）

「ユニセフによる子ども発達支援－
発達の国際格差解消の観点から」
垂見（野々山）裕子

このセミナーは、ユニセフの幼児教育課で研究・実践両面において活躍されている垂見（野々山）裕子氏をお招きし、子ども（特に幼児）発達支援の政策形成やプログラム策定、調査研究におけるユニセフの役割を議論するものである。研究者、学生、JICAやNGOの実務家などが参加し、子どもの発達の国際的格差やユニセフの活動などについて積極的な意見交換が行なわれた。



第2回国際セミナー 2008年1月10日（木）

「アジアにおける幼児教育の動向と課題－
韓国とベトナム」
李基淑 Dinh Hong Thai 内田伸子

このセミナーでは、アジアの幼児教育の現状と課題をテーマとして取り上げた。グローバルCOEの海外事業推進担当者である李基淑教授とDinh Hong Thai 准教授が来日し、それぞれの国の状況について発表がなされた。また、2人の発表に続いて、内田伸子お茶の水女子大学副学長から日本の幼児教育経験にもとづいたコメントがなされた。研究者、学部学生、大学院生が多数参加し、積極的な意見交換が行なわれた。



第3回国際セミナー 2008年1月14日（月）

「初等教育における格差－ベトナムの事例」
Tran Dien Hien 浜野隆

ベトナムの初等教育における格差の問題をとりあげました。まずは、参加者にベトナムの初等教育の現状に関する理解を促すため、Tran Dien Hien学部長からベトナムにおける初等教育の制度と現状、課題などが説明された。それに続き、本学の浜野隆准教授から、ベトナムにおける格差、特に地域間格差に関する発表がなされた。研究者、学部学生、大学院生が多数参加し、積極的な意見交換が行なわれた。



第4回国際セミナー 2008年1月21日（月）

「アメリカからみた日本女性イメージの変化－
経済発展は文化格差を解消したか－」
Jan Bardsley

海外からの参加者も含め、50名ほどの聴衆が集まった。バースリー教授が、アメリカにおける、日本女性のイメージの歴史的变化を、ミスコンテスト、芸者、皇室という3つのイメージから講演され、日米間のイメージや関心の格差の過去と現在について活発な意見交換がなされた。



"Health Rights and Responsibilities: An International Exploration of Health Care"

(健康の権利と責任：ヘルスケアをめぐる国際的動向)

小林廉毅(東京大学教授)

Karen Seccombe (Professor,Portland State University)

Tran Diep Tuan (Lecturer,University of Medicine and Pharmacy at HoChiMinh City)

John C. Campbell (Professor,University of Michigan)



International Symposium



国際シンポジウムに参加して
Debbie Storrs, CSD visiting professor

良好な健康とヘルスケアへのアクセスは、ライフスパンを通じて生活の質の中心的な役割を果たしている。しかしながら、世界中の国々が、市民に接近・利用可能なヘルスケアを提供するための多くの課題に直面している。2008年1月13日にお茶の水女子大学で開催された国際シンポジウムでは、誰がヘルスケアに責任をもつのか、ヘルスケアは市民の権利なのかについての議論が展開された。日本、アメリカ、ベトナムが直面するヘルスケアの課題についての講演に、大学院生、専門職、研究者ら60名以上の参加者が参集した。

まず、小林廉毅東京大学教授が、日本の国民皆保険制度の歴史的概観を、現在の日本で進行中の社会経済のおよび人口動態の変化に言及しながら講演された。次に、Karen Seccombeポートランド州立大学教授が、雇用者ベースのヘルスケアの不十分さと体系だっていないヘルスケアのを提示しながら、アメリカのヘルスケアの現状を紹介された。さらに、Tran Diep Tuanホーチミン医科薬科大学講師が、ベトナムのヘルスケアおよび小児医療の現状を紹介され、ベトナムのすべての子どもに質の高いケアを提供す

ることが今後の課題であるとされた。

3名の演者の講演に対し、Campbellミシガン大学名誉教授がダイナミックなコメントを提示された。Campbellは、それぞれの国にとって中心となる課題は、ヘルスケアをより接近可能なものとするところであるとしている。Campbellによれば、市場と民営をベースにするアメリカのヘルスケアは、市民が適正なコストで質の高いケアにアクセスすることの妨げになっている。国民皆保険制度によってこのことを可能にしたことを日本は誇りとすべきである。

メディアや保守的なエコノミストがヘルスケアを「コントロールできないもの」としているが、日本のヘルスケアの支出は適正で安定的であり、その国民皆保険制度内の政策によってこうしたことを維持できるという根拠もある。

内田副学長が閉会の辞において、比較分析や継続的な格差探求の重要性について述べられた。シンポジウムに続き開催された懇親会の場で、インフォーマルかつ有意義なディスカッションが展開されていた。(大森美香准教授訳)

デビー・ストアズ教授は、特別教育経費プログラム「コミュニケーション・システム開発プログラム」(CSD)のもと、2007年秋学期にお茶の水女子大学の外国人研究者に就任、学部と大学院授業を担当くださいました。主に、地域におけるヘルスケア、人種的アイデンティティを研究されており、Making a Difference: University Students of Color Speak Out, "Imagining a Liberal Education: Critically Examining the Learning Process Through Simulation," and "Like a Bamboo: Representations of a Japanese War Bride" など、多数の著書を出版されています。

国外事業推進担当者紹介



韓国、梨花女子大学
リー キスク
李 基淑 教授

人間文化創成科学研究科・客員教授
国際的格差領域担当

ソウル梨花女子大学 幼児教育学を学び、同大学附属幼稚園でフルタイムの教員として勤務された後、アメリカのVanderbilt University大学院博士課程を修了され、幼児教育学のM.A.とPh.Dを取得されました。帰国後、1979年より梨花女子大学教授として幼児教育学を教えておられます。この間、2005~2007年 韓国幼児教育学会会長、2007~現在、韓国教育学会会長数多くのprofessional honorを得られ、韓国幼児教育学界の、文字通りの権威であられます。



ベトナム、ハノイ教育大学
ディン ホン タイ
DINH HONG THAI 准教授

人間文化創成科学研究科・客員教授
国際的格差領域担当

1986年ロシア科学アカデミーにて博士(教育学)を取得。専門は幼児教育、特に幼児の言語発達と言語教育の指導法を専門とする。幼児教育、幼児発達分野で幅広い著作がある。代表的なものとしては、以下のようなものがあげられる。Teaching Child to tell by Experience (2004), Language Teaching Arts (2005), Theory of Language Activities and Teaching Language (2005), Vietnamese Early Childhood Education in 60 years of Development (2006)。

国際的格差領域

国際的格差領域は、グローバリゼーション下における国際的格差の構造に着目し、国際的格差構造の解明とその是正のための教育支援のあり方を解明することを目的としている。メンバーは、助教やリサーチフェローを含めて10人、専門分野は発達心理学、小児神経学、幼児教育、経済学、教育開発学など多岐にわたっている。

国際的格差領域には次の4つの研究テーマがある：①就学前の発達環境とリテラシーの発達、②地方分権が進む中での教育における財政基盤と住民参加、③健康と発達障害に関する格差研究、④格差是正のための政策課題と国際協力。

このうち、最初の3つ(①～③)に関しては、2008年度は、対象国(今のところは韓国とベトナムを想定しているが、テーマによっては他のアジア諸国にも広がる可能性がある)に適用可能なテストバッテリーおよび調査票の開発を進める予定である。調査票の作成は、海外事業推進担当者との緊密な連携に基づき進める予定である。テストバッテリーと調査票が完成したら、それぞれの国でベースライン調査を行なう予定である。

4つめのテーマ(④)については、JICAとも協力しつつ、海外の教育行政官等の研修プログラムを実施し、その効果を分析する。お茶の水女子大学は2003年に文部科学省によって幼児教育協力の拠点に選ばれ、以降、様々な研修事業を実施してきた。それらの経験に基づき、幼児教育協力の効果の分析を行なう予定である。

教育・社会的格差領域

【概要】

教育や職業を通して現れる格差のメカニズムを明らかにすることを課題とする。主に教育学的、社会学的視点から、学力格差の構造、トランジション(移行期)における格差、老年期における格差等を扱う。また格差是正をめざす教育・社会政策について政策評価研究を行う。

【プロジェクト】

- ①学力格差の構造、トランジション(移行期)における格差を扱うため、JELS2007、JELS2011(青少年期から成人期への以降についての追跡的研究、Japan Education Longitudinal Study)を、JELS2003の継続として遂行する。
- ②中高年期のライフステージにおける格差再生産メカニズムの解明。
- ③格差是正をめざす教育・社会政策についてのマイクロ・シミュレーション、歴史的、国際比較等の方法を用いた政策評価。

養育環境格差領域

養育環境格差領域では、子どもの養育過程における家庭や保育・教育施設の中での環境と個人との時系列的な相互作用に着目し、人間の発達に沿ったQOL(クオリティオブライフ)に現れる格差の解明をめざしています。

20年度には、子どものメディア使用をめぐる情報格差に関する縦断調査、ハイリスク児の養育環境に現れる格差の研究、乳幼児期の保育・養育環境に現れる格差に関する縦断調査、妊娠期よりの家庭環境に関する縦断調査(24年目の成人期における追跡調査)を実施します。

2008年度 開催予定

東アジア"子ども学"交流プログラム

テーマ：子どもの成長・発達と生活環境～子ども学的アプローチ～

日時：2008年4月19日(土)、20日(日)10:00～16:30(予定)

場所：お茶の水女子大学 理学部3号館701室

基調講演："小皇帝"の真実(仮)

朱家雄(中国華東師範学前教育研究所所長)

参加費：無料。事前登録制、先着順。

主催：お茶の水女子大学G-COE、チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)

共催：(株)ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所

後援：中国中日本大使館教育処、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、日中教育交流会議

子どもの成長・発達と生活環境について、医学的、発達心理学的、教育学的、社会学的などを統合した子ども学的意義を考える。子どもは人類共通な生物学的側面と生活環境から見ると異なる社会的側面を合わせ持っている。子ども達の成長・発達について、日中の共通点と相違点を見出し、お互いに学び合う突破口を探り、それを支援していくには、"子ども学"は何かできるのかを考える。

インターネットからのお申し込み <http://www.crn.or.jp/>

■■■ 編集後記 ■■■

グローバルCOE「格差センシティブな人間発達科学の創成」ニュースレター第1号を日本語、英語同時にお送りします。

研究を開始して一年未満ですが、すでに多くの研究業績が上がりつつあり、紙面作成には困ることがありませんでした。これからも継続発行しますので、よろしく願いいたします。

広報委員会委員長：三輪建二(教育・社会領域担当)

「子どもの暮らしの安全・安心～命の教育へ」 公開シンポジウム

日時：平成20年5月25日(日)13:00～17:00

場所：お茶の水女子大学 徽音堂

基調講演：日野原重明先生(聖路加国際病院名誉院長)

参加費：無料。1000人までで参加申し込み打ち切り。

主催：グローバルCOE

共催：リスク社会のコミュニケーションシステムの開発プログラム

後援：お茶の水女子大学附属校園連絡協議会(PTA)

詳しい内容はお茶の水女子大学グローバルCOEのHPをご覧ください。

<http://ocha-gaps-gcoe.com/>



発行

お茶の水女子大学 グローバルCOE プログラム
「格差センシティブな人間発達科学の創成」

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
グローバルCOE事務局

Tel/Fax：03-5978-5247

E-mail：jimu-gcoe@cc.ocha.ac.jp

URL：http://ocha-gaps-gcoe.com/